NY エッセイ ㉓

中瀬 有紀

名和晃平作 ***PixCell-Deer#24*** メトロポリタン美術館

白黒黄

サンディエゴ郊外にある大型のショッピングセンターで、見ず知らずの白人女性が私に対して「イエロー」と叫んだのは、もう既に5年以上前のことです。その瞬間私は自分がマイノリティであるということを自覚したと同時に“人種のるつぼ”と言われるアメリカの現実を理解しました。この国では異文化が混じり合っているわけではなく、人々は人種によって住み分けがされたそれぞれの土地に人種同士固まって生きています。

南アフリカ共和国出身の劇作家、演出家そして役者であるAthol Fugardによる反アパルトヘイトを主題にした戯曲『Blood Knot』は1964年にオフ・ブロードウェイで初めて公演されました。登場人物は兄弟であるMorrisとZachariahの二人で、父親が違う彼らは肌の色が違います。MorrisはZachariahよりも肌の色が白く、母親からそれぞれ違ったおもちゃを与えられ異なった幼少時期を過ごした二人は、お互いを必要としながらも各自の肌の色による相違を越えることができずに、幸せとは言い難い共同生活を続けます。

『Blood Knot』はFugardのアメリカでのキャリアを立ち上げた作品であると同時に、1964年当時、アメリカにとって初の南アフリカ共和国出身者による戯曲の上演、さらに初の異人種が混合した配役でした。それから約50年経った今年の1月、同作品はニューヨークのSignature Theatreで約1ヶ月間の公演が行われ、公演に際しFugardが言った言葉は“I realized that [the audience members] weren't looking at a museum piece, they were looking at something, the story of those two brothers and its racial hatred was pertinent to their own lives at this moment in time,”（観客が舞台上で起こっている出来事を前にして、美術品を眺めるようにではなく、兄弟間の異人種がもたらす嫌悪がまるで観客各自の生活の一部であるかのように感じていることに気がつきました）です。肌の色の違いによる苦闘は今もアメリカの一部です。

照明デザイナーとして色を見るとき、色とは電磁スペクトルのごく一部である可視光線、いわゆる光です。人間の網膜は光が到達した際に波長の差を検出し、情報が脳内で視覚情報化される際、その波長の違いが色として認識されます。したがって、色は脳内でのみ存在するバーチャル・リアリティと言えます。人間の脳が生み出す架空の世界が現実にもたらす社会問題をどのように乗り越えるか、それは個々が自分の脳を知るほかありません。